

第七章 附録すべきもの三種

以上にて倭玉篇若くは倭玉篇の脈を引けるものゝ記述を終へたれば、最後に玉篇の名を負へるもの三種を附録せんとす。三種とは(一)耶蘇會士刊行の小玉篇、(二)朝鮮にて行はれたる韻會玉篇と全韻玉篇これなり。

1 耶蘇會士刊行の小玉篇 (圖版二十參照)

耶蘇會士刊行の小玉篇は「落葉集」の一部分をなすものにして、落葉集につきては新村博士の著南蠻廣記の「吉利支丹版四種」に於て述べられたる所あれば左に之を引かん

落葉集といへる耶蘇會士刊行の字書云々待賈堂といふ藏印を押したる一本の現に大英博物館の泰東部の文庫に藏せらるゝに由りて見れば、此書嘗て達磨屋活東子の珍襲として江戸に存せしことあるを知るべし。此本元とサトウ氏が我國に得て一八八三年明治十六年之を英國に將來し倫敦なる同館に寄附せしものに係る。蘭國ライデン大學圖書館亦此書の善本を藏す(慎吾云ふ、土井學士の談に「此の分は小玉篇を缺く。又英國のクラウホード伯爵家にも一部ありて佛國より入手せりといふ。英の二種には俱に小玉篇あり」と)

今此字書の組織を(一)落葉集本篇(二)色葉字集(三)官名並に國名(四)小玉篇の四部に分けて解説せんとす。第一の落葉集は字音より字形と字訓とを引くに供し、第二の色葉字集は字訓より字形と字音とを引くに備へ、第四の小玉篇は字形より字音と字訓とを引くに用ゐらるゝ様にも按配せり、即ち全書は一の統合的字典にして從來の伊呂波字類抄乃至節用集の系統の辭書と玉篇流の字書との二種を巧に分解綜合したるものなり。

四、小玉篇 本文に入るに先ちて左の緒言及び目錄あり、其緒言に云く

右落葉集は字のこゑを用ひていろはをついで色葉字集はよみを以て記すれば讀こゑを知て字のすがたをしらざる時の所用をなすといへども文字のかたちを見て其よみこゑをしるに道なき便として右兩編の内より今又此せば玉篇をあみ畢

次に目錄ありて天文地理人物聲色器財艸木飲食鳥獸言語衣服冠冕雜字の十二門に分つ、寧ろ本篇の偏旁文字の索引ともいふべきものなり。そは例へば本篇には日月人女などの如く偏旁を配列したるに、目錄には之を分類して日月などを天文門に人女などを人物門に收めて順序を全く異にしたるは是れ偏旁を畫引にて求むるの常則(愼吾按するに此の言や、病あらん、畫引は字彙出でて大に行はれたるが、其の字彙は明の萬曆乙卯に成りて我が慶長三年には未だ世に出でねば、此時には畫引はなほ夢想だもせられざりしなり)に由らずして、先づ之を如上の各部門にて探らしめんととの仕組に外ならず、換言すれば此

の小玉篇は畫引の方法を棄てゝ、分類的索引法を取りたるものなり。而して編者の一新案ともいふべきは偏旁の文字は其稱呼を附して之を振假名にて示し、更に偏旁文字の下に行艸二様にて略艸の同字を小さく標出せることなり、例へば天文門に於て日^ひ月^{つき}火^か地理門に於て土^ど水^{みづ}などの如し

本文中に於る文字の配列及び旁書註出の方法大略左の如し

一 回ひへん ○日^ひひ^ひに 明^{あき}あくる 曝^{はく}曝^{はく}

既に緒言に見えたるが如く、此部の字彙は文字の形を知りて音と訓とを探るの用に供せらるゝものにして、其爲には先づ其字の成立により其偏旁を目録即ち彼の分類索引につきて檢出し、然る後本文を見て其偏旁下の文字を求めざるべからず、漢字の檢索法として

は一種の試なり
末に類^る少^{せう}字として 天^{てん}そ^そら 天^{てん}大^{だい}などの文字を擧げて十干之異名と十二支之異名とを附録せる後、小玉篇の違^{ちが}字と題する正誤表を以て此部の字彙を終り併せて全書を結べり

同書の「活字印刷術の傳來」に於ても又

落葉集 一五九八年慶長三年、長崎(?)學林版 美濃紙摺で活字版の様に見えるが疑はしい點もある。行艸躰漢字の兩傍に平假名の振假名を附け、又本字の下に小く平假名を註

し、或は其の序文に國文を平假名交り艸艸の漢字で綴つた所など文字は極めて精巧、慶長時代の本邦製活字版に優ること數等

と有り。余も博士より其の寫眞を借覽したれば今少し補記すべし。落葉集本篇は六十二葉、色葉字集等は廿三葉、小玉篇は十九葉にてすべて百四葉あり。小玉篇目錄は

天文門	日	一	〇月	二	〇火	廿一	〇風	八十八	〇雨	七十四
地理門	土	十八	〇水	十九	〇ノ	廿	〇邑	廿二	〇阜	廿九
	〇石	廿五	〇穴	七十二	〇田	三十	〇山	七十五	〇門	八十六
	〇瓦	七十	〇尸	八十						
人物門	人	三	〇女	四	〇目	五	〇耳	六	〇心	十
	〇小	十一	〇舌	七	〇口	八	〇毛	十五	〇身	十二
	〇手	十三	〇齒	十四	〇骨	十六	〇足	十七	〇力	六十二
	〇皮	百一	〇子	五十四	〇尸	八十一	〇人	七十八	〇司	六十五
聲色門	多	百	〇白	六十						
器財門	刀	廿八	〇弓	六十三	〇矢	六十四	〇舟	五十三(六の誤とす)		
	〇車	五十七	〇爰	六十七	〇斤	百二	〇网	七十五(九の誤とす)		
	〇方	五十八	〇斗	五十九(九十九の誤とす)	〇皿	九十五	〇戈	九十四		

艸木門	〇金	廿七	〇玉	廿六	〇頁	四十七	〇貝	四十八		
	竹	七十六	〇木	廿三	〇艸	七十七	〇禾	卅二		
飲食門	食	卅三	〇米	卅一	〇甘	六十六	〇酉	四十四		
鳥獸門	犬	卅七	〇馬	卅八	〇牛	卅九	〇羊	四十	〇鹿	四十一
	〇鳥	四十二	〇隹	四十三	〇虫	四十五	〇魚	四十六	〇角	五十
	〇革	五十一	〇羽	五十二	〇虎	八十三				
言語門	言	九	〇示	五十五(四の誤とす)	〇見	九十三	〇久	五十八		
	〇方	五十八	〇彳	五十六(五の誤とす)	〇立	五十九				
衣服門	衣	卅四	〇巾	卅五	〇糸	卅六				
冠弁門	冠	七十一	〇穴	七十二(再出)	〇一	七十三	〇(消したり)			
	〇(消したり)	〇(同上)	〇人	七十八(再出)	〇尸	八十八(再出)				
	〇尸	八十一(再出)	〇尸	八十二	〇尸	八十四	〇尸	八十五		
	〇門	八十六(再出)	〇門	八十七	〇八	八十八(再出)				
	〇門	八十九	〇勺	九十						
雜字門	几	六十八	〇父	六十九	〇寸	六十一	〇欠	四十九	〇元	九十一

○堂 百三 ○乙 百四

○類少字付支干之異名 百五

とあり、即ち百五部を立てたるものにして、之を半面十一行四段として記されたり。各部の下の數字は書中の順序とす。

本文は半面八行にて毎行の字は一定せず、各部の文字も極めて少し。日部は

日 明 曝 瞑 暗 昨 晴 晦 時 暖 曜 映 照 味 曉 晚 星 昌 昆
量 暴 早 景 曇 暑(二度出す) 昇 替 音 香 暮 者 書 督 春 普 習
昔 旨 皆 曾 智

の四十二字に止まり、右に音左及び下に訓を出すも一二に止まり、時の訓トキ、シバラク、アキラカ、ヨリ、映の訓ウツロフ、アキラカ、カ、ヤク、エイスルの四ツに上れるを最多とす。

部首の讀方の今日と異なるを出さんか。

邑ノボリサル 女ニヨヘン 心シメコ、ロ 足アトヘン 子ステコヘン 斤ハカリ
戈タスキ 食ジキヘン 米ヨネヘン 魚ギヨヘン

2 朝鮮にて行はれし韻會玉篇と全韻玉篇

半島にても嘗て玉篇直音の刊せられしは第三章明本11に、永樂本の翻刻せられしは第五章本朝刊本1に述べたり。この他顧氏のは毫も關係なけれど、玉篇の名を負ふもの二種あり。その一を韻會玉篇といふ。朝鮮總督府にて作れる朝鮮圖書解題に曰はく

韻會玉篇 二卷 崔世珍著 板本

本書は崔世珍の著す所にして元の黃公紹の作れる韻會の集字は精詳なるも其の解釋繁雜に流るゝを以て只韻會の集字のみを襲取して解釋を新にせるものなり書成るや中宗大いに之を賞獎し其の三十一年官刊せしむ

崔世珍字は公瑞成宗の時に生れ燕山君癸亥に登科し官同和中樞事に至る中宗の時に歿す

と。中宗の三十一年は吾が天文六年にして、かの玉篇要略集の奥書なる大永四年より僅に十四年の後なり。吾が宮内省圖書寮に二本あり、一は古今韻會に附したる寫本、一は單行の板本なり。

寫本には崔世珍の引ありて

凡そ字は必ず其の聲を類へて韻書を爲れば亦宜しく必ず其の形を類へて玉篇を爲るべく、然して後に乃ち形を指して字を尋ねて其の韻を考ふるを得べし。今この韻會既に其の聲を類へたれど其の形を類へず、是乃ち其の韻を存するのみにて其の篇を缺くもの、宜

なるかな後學の深く憾むる所あるや。臣既に其の弊を見、又衆求に迫られて韻會に收むる所の字を取りて玉篇を彙成し、音釋を着けずして獨り韻母を係け、後學をして韻を尋ね字を索むること掌に指すが如くならしむ(原漢文)

と云へる、以て書を成すの動機と書の舛裁とを悉せり。

板本には此の序を缺けるが、凡例七則ありて亦書の内容を知るに足るものあり。

古の玉篇には廣く諸字を收めたるが故に必ず音解を著けぬ、今撰の玉篇は只韻會に收むる所の字を收めたる故に音解を著けず

韻會には必ず正本の字を收めて常用の舛を著さぬが多し、煮字は俗寫なれば韻會には只齧字を著して煮を其の注の内に收めたるが如き、此の類甚だ多し、今常用俗舛の字をも取りて偏旁の下に加へ出すこと煮字を以て火部の下に收むるが如し

凡そ或作、俗作の字の常に用ひて闕き難き者にして韻會に收めずして只注内に收めたる者をば今は乃ち部内に收めて大字となす(同上)

乃ち知る義釋は韻會に依りて略したれど、文字の出し方には大に實用を顧慮して改良したるを。この序や例に韻書に韻して玉篇と云へるによりて、古の玉篇と云へるも顧氏の書には全く關係なきを知るべく、又朝鮮にての讀書は音讀なれば音釋を着けて韻母のみを係けたる物も吾が國に比して復に有用なるを見るべきなり。

その二を全韻玉篇といふ、同解題に

全韻玉篇 二卷 著者未詳 板本

本書は康熙字典の舛式によりて作りたるものなるも主として朝鮮日用の文字のみを揀收せしを以て康熙字典に比し字數約十分の一に過ぎず、註釋亦極めて省略せり、唯諺文を以て音を施し且詩作者の爲に韻字を附したるは朝鮮字典として尤も簡便なるものとす。始めて官刊せしは正祖の時なるも著者詳ならず

と、正祖の朝とは吾が安永六年より寛政の末年までなれば韻會玉篇の出でたるよりは凡そ二百四十年の後たり。靜嘉堂文庫にたゞ 全韻玉篇 とせると 校訂全韻玉篇 とせるとの二種を藏す。校訂本には總目の後に

我が東の字學、古は韻書若くは正音通釋(慎吾いふ本書は廣く各種の字書より字を集め四聲通解の字音によりて支那音を字下に示したるもの、朴性源の著、二卷)三韻聲彙(又いふ本書は支那傳來の三韻通攷に倣ひて平上去の三聲を韻順に彙集し入聲は卷尾に附したるもの、洪啓禧の著、三卷)韻攷(又いふ三韻通攷の略稱、增補本は全濟謙成孝基に成る)奎章全韻(又いふ本書は朝鮮の諸字書中最も精細なりとせらるゝものにて四聲を以て分類し逐字標別したるもの、正祖の命撰、二卷)を以て皆便を科試の計畫に取るとなし字に於ては初より其の書なかりき。健陵(正祖をいふ)戚際(此の二字解し難し、御宇ほどの意なるか)に至り

て始めて新定玉篇ありて目次は字典に倣ひ多少は奎韻に依りて初學に授く、馴致功を極めて大に裨益ありて世に行はるゝ既に久しく板刊し字缺く間、或は翻刻せるは義舛ひ音乖きて反つて誤を滋すこと多し、戊戌の冬坊人、新木に鋟せんことを謀りて余に校訂を請ふは其の嘗て奎韻を正せること有るを以ての故なり、見獵の想自ら已む能はず逐字に査正して復、眞面を見はし、間頭の俗音且以て目を醒すといふ 慎村子書す

とあり。舛裁も收めた文字も非校訂本と同じくして釐頭に漢字を出しては諺文にて其の音を註せり、これ即ち間頭俗音ならん。

著者の架上にも一本あり。見返しに己丑新槩とあるは李大王二十六年ならん、標記なければ非校訂本なるべし。さては校訂本出でしも猶非校訂本の行はれたるにや。

この書には匸部に虎に从ふ字、人部に賜に从ふ字などを收めて 増 と註せり。これらの字は字典に存すれば増とは舊本より増したる意ならん、則ちこの書には更に又略本廣本あるか。